

NEWSLETTER

編集・発行 日本催眠医学心理学会

No.68 2017. 9. 30

〒162-0801 東京都新宿区山吹町358-5

(株)国際文献社

TEL: 03-3362-9741

日本臨床催眠学会 ☆☆ 日本催眠医学心理学会 合同学術大会（JSCH第19回大会、JSH第63回大会）開催にあたって

合同学術大会大会長 松木 繁（鹿児島大学大学院）

既に、会員各位には第1号通信にてご挨拶申し上げていますが、この度、JSCH第19回大会及びJSH第63回大会の合同学術大会を鹿児島大学稲盛会館及び総合教育研究棟において開催することになりました。期日は2017年11月3日（金・祝）～5日（日）の3日間の開催予定です。

大会テーマは、「世界レベルの催眠研究の構築を目指して—わが国における催眠の臨床実践と効果研究を架橋する—」としています。身の丈を越えた大会テーマではありますが、わが国における催眠研究の活性化を切望する私の願いから出たテーマであり、本大会を機に両学会がこれまで築いてきた臨床実践の紹介やその効果研究、さらには、それを支える基礎研究の活性化が促進されることを期待してのものであります。

大会は基調講演・教育講演・シンポジウム・研究発表・技法研修会・特別ワークショップを計画しております。教育講演・特別ワークショップにはアメリカからワシントン大学のMark P. Jensen先生をお招きして、『Hypnosis for chronic pain management: New evidence for an old treatment.』（仮題）及び『Hypnosis and hypnotic cognitive therapy for chronic pain management』（仮題）というタイトルで慢性疼痛治療に対する効果研究の世界的な動向についてお話して頂くと同時に、慢性疼痛患者への催眠及び催眠認知行動療法の効果的な適用方法についてデモンストレーションを交えた実践的なワークショップを行って頂けるようお願いしているところです。

また、3日目に開催予定のシンポジウム2では関西医科大学の水野泰行先生に座長をお願いして、『我が国における慢性疼痛治療への催眠適用』（仮題）というテーマでおこないます。数名のシンポジストからの話題提供を基に、我が国における慢性疼痛治療の現場での実践、特に、催眠及び催眠認知行動療法を適用している実践やその効果研究について、議論を深めたいと考えています。もちろん、Jensen先生にもコメントをお願いし世界の動向を見据えながら、我が国における慢性疼痛治療への催眠適用の可能性を検討してみたいと考えています。

一方、わが国における臨床催眠実践も独自の発展を遂げており、認知行動療法との併用や近接領域、例えば家族療法やブリーフセラピー等における効果的なコミュニケーション・ツールとしての利用法などとして利用され実績を積んできております。2日目に予定しているシンポジウム1においては、向陽台病院の中島央先生に座長をお願いして、『臨床催眠を多角的に紐解く』（仮題）というテーマで行います。このシンポジウムでは、話題提供者から出された催眠適用事例を基に催眠適用の工夫や配慮についてさまざまな角度からの

検討を加えることを行う予定です。

研究発表の時間もできる限り多く作りたいと考えています。2号通信において、研究発表に関する具体的な手続き等についてお知らせできましたので、会員各位の積極的な研究発表や臨床実践事例報告を期待しております。

来年のNHKの大河ドラマが「西郷(せご)どん」に決まり、鹿児島は桜島の勢い同様に活気づいております。芋焼酎と温泉を満喫しながら催眠の新たな可能性について語り合う機会になればと思います。多数の皆様のご参加と研究発表を心からお待ち申し上げております。

～宿泊に関するお知らせ～

- ・11月3日(金・祝)は鹿児島市中心部にて鹿児島おはら祭が開催予定です。県内外から多くの観光客が見込まれますので、宿の予約はお早目にされることをお勧めいたします。なお、おはら祭りのメイン会場となる天文館周辺は2日(木)18時～21時30分、3日(金・祝)は9時30分～17時30分の間が交通規制区域になるため、鹿児島大学へ向けてのアクセスが不便になります。鹿児島中央駅・騎射場・鴨池周辺で探されると便利です。
- ・第2号通信におきましてJTBによる宿泊予約のご案内も致しました。こちらをご利用ください。

編集委員長に再び就任して

長谷川明弘(東洋英和女学院大学)

前期に引き続いて、今期も「催眠学研究」の編集に携わることになりました。前回の就任挨拶で20年以上発刊が遅れ続けていることを記しておりました。未だ解消されないこの事態の解決に向けて鋭意努力していきます。編集委員長を継続して務めることを機に、催眠学研究の創刊号からのバックナンバーを古書店経由で入手し、手元に全巻が揃いました。当初は学会誌を企画・編集していく上での参考資料として購入しましたが、そんな中、創刊号からの目次が本誌第50巻に掲載されていましたが、実際に学会誌を手にとって論文の内容に目を通すと脈々と続いてきた本学会の歴史の積み重ねがある一方で、再検証を行って新たな知見に繋がる手がありました。催眠は、長年にわたり人を魅了し続けてきた現象で研究と臨床の両面にわたって活用されてきたことを再認識しました。

催眠学研究のバックナンバーの販売は学会事務局で対応しています。過去の知見の蓄積を参考にして是非とも会員各位が新たな知見を生み出して頂きたいです。そして基礎から臨床実践を橋渡しすることが可能な催眠の新

たな成果を学会誌に載せて国内外に発信して頂きたいです。投稿先は、末尾の編集局連絡先にご送付願いたく思います。電子媒体での投稿をご希望の場合は、予め編集局までお知らせください。前向きに対応を致します(試験的に電子投稿を受け付けております)。

なお今期の編集委員はアルファベット順(敬称略)で、安達友紀(滋賀医科大学医学部附属病院ペインクリニック科)、小泉晋一(共栄大学)、窪田文子(いわき明星大学)、宮下敏恵(上越教育大学)、中島央(向陽台病院)、齋藤稔正(立命館大学)、清水貴裕(秋田大学)、鈴木常元(駒澤大学)、田村英恵(立正大学)、田中新正(大分大学)、上地明彦(関西外国語大学)となっております。どうか宜しく願います。

投稿先は、編集局連絡先にご送付願いたく思います。

【編集局連絡先】

〒226-0015 神奈川県横浜市緑区三保町32

東洋英和女学院大学 人間科学部

「催眠学研究」編集局 長谷川 明弘

電話; 研究室直通: 045-922-7729

電子メール: hasegw_a@toyoeiwa.ac.jp

大学代表番号: 045-922-5511 (代表)

FAX: 045-922-2260 (共通のため氏名明記)

広報委員長に就任して

飯森洋史 (飯森クリニック)

私は2016年秋、理事長に選出され、引き続き広報委員長も兼任することになりました。私が広報委員長に初めて任命されたのは2011年の3月でした。その時のニューズレターで、この学会は動脈硬化を起し始めているから何とかしなければならぬと指摘し、まずは、ホームページのリニューアルに着手致しました。その後の発展を願ってのことでしたが、残念ながらその後、発展どころか後退の一途を辿ってきて狭心症を起し始めているのが現状です。

広報の役割は、学会の現在の活動状況、過去の活動記録、今後の活動予定を広報すること、並びに組織の理念、組織維持の為の規則、手続き等を提示することにあります。また、新しい情報を会員の皆様にお知らせする役割と、会員の皆様のご意見を集約するという役割を担っていると思います。その為のツールとして、ホームページ、ニューズレター、学会誌などがあり、今回より学会事務局のマイページが加わりました。

私が新理事長に選出されてから約10ヶ月余りが経ちました。所信表明で述べましたように、まずは事務局を移転し、外国人講師を招聘しての研修会改革に先陣を取りました。招聘講師Lemke先生の講義を拝聴致しますと、驚きがたくさんありましたし、多くの新鮮な刺激を受けました。研修会は大成功でしたし、それに伴って20数名の新入会員の獲得にも成功致しました。学会にはその他、改革すべき視点はたくさんあります。今後少しずつ改革を推し進めますので、会員の皆様の積極的な学会へのご参加を宜しくお願い致します。また今後、ニューズレターの執筆や学会誌への投稿をお願いすることがありますが、その際は宜しくご協力の程、お願い致します。

企画・教育委員会委員長に就任して

小泉晋一 (共栄大学)

今期から本学会の企画・教育委員会に携わることになりました。どうぞよろしくお願いたします。催眠は、技法に習熟すればとても便利な臨床ツールになると思いますが、使いこなせるようになるまでには時間がかかりますので(どの臨床技法も習熟には時間がかかると思いますが)、初学者にとっては敷居が高いものになって

いるのかもしれませんが。本学会の催眠技法研修会は、初学者に催眠についての知識を得てもらい、面白さを実感してもらい、技法を習得してもらうための窓口でもあると思います。学会が発展するためには、多数の若手研究者や臨床家に入会してもらうことが不可欠です。これからの催眠研究や催眠臨床を担う若い世代を育てるためにも、充実した催眠技法研修会を開催する必要があると思います。

前回のニューズレター(第67号)で、飯森洋史理事長が本学会の改革案の一つに「研修制度の見直しと充実」をあげていました。具体的には「催眠技能の習熟度の評定を行い、クラス分けを厳密にする」ことや「数回シリーズで学習できるよう」な計画を立てること、「外国人講師を積極的に招聘する」ことなどを提示しています。短い任期の中で一定の成果を示すことにはかなりのプレッシャーを感じますが、できる限りの努力をして魅力のある研修会を開催できるようにしていきたいと考えております。

特に催眠を臨床適用するときには有用な知識と技法とがあります。催眠技法研修会では、これらの知識や技法をどのような形で提供することができるのか、また受講される方たちにどのようなニーズがあるのかを今後よく検討して、実りのある研修会を企画していきたいと思えます。本学会は昨年(2016)で60周年を迎えました。人間で言えばちょうど本卦還りをした年齢で、節目の年でもあります。より魅力ある研修会を提供することができるようにするためにも、皆さまのお力添えをいただけますことを心からお願申し上げます。

研究委員会委員長就任にあたって

鈴木義也 (東洋学園大学)

この度、前任の福井義一先生から研究委員長を引き継ぎさせていただきました。学会の仕事は経験と力不足につき、多々至らないこともあるかと思いますが、どうぞよろしくお願いたします。

近年の私は、ブリーフ、アドラー、催眠あたりをとほとぼとうろついております。それぞれを折衷的に使っていますが、3つ共、折衷的に用いやすい性質を持っているのでカクテルよろしく楽しくやらせていただいております。アドラーはこのところ人口に膾炙していますが、欧米では特段盛り上がりつつあるわけではありません。しかし、催眠は海外では着実に実践されているとうかがいますので、日本でも十分広がるポテンシャルがあるものと信じています。

本学会は研究と臨床の両方の研究を積み重ねてきた歴史があります。それは催眠というものが、科学的な研究対象であるだけでなく、医学的・心理学的な臨床的援助手段でもあるためだと思われます。会社では製造と営業の両輪が必要だと言われますが、学会ではこの研究と臨床の両輪が機能することが発展に欠かせません。その両方の研究が本学会で盛んになることを願っています。

いずれにせよ、研究や実践は個人的レベルで終わらずに、社会に貢献するために共有されることが望まれます。そのために用意されているのが学会大会や学会誌という公表の場です。中には口伝や言語化のしづらいものもありますが、人は多くを文字から学んでいます。もしも先人が文字に残してくれなかったら、私たちはその伝承を受け継ぐことはできなかつたでしょう。私たちも後の世代のために自分自身の実践を書き記せばいいのだと思います。

故吉本武史先生から私は催眠を初めて教わりました。吉本先生はご自身の実践を「現代催眠」と呼んでおられました。古典芸術という言葉がありますが、それを作った当人は「古典」をしているつもりはなく、ただそのときにできる「現代」の芸術をしていたわけで、古典という名は後世の人が付けたものです。私たちも今している「現代」の実践を残せば、それは自然と新しいオリジナルなものになるのではないのでしょうか。

会員の皆様が思い立ったが吉日で、日々行っている催眠との関わりを発表し、文字にしていただければと大いに期待する次第です。

国際交流員会から

—世界レベルの催眠研究の構築を目指して—

松木 繁 (鹿児島大学)

前任期に引き続き国際交流委員長をお引き受けすることになりました。公務に忙殺されて、これまで国際交流委員会としての活動があまりできていませんでしたが、前任期では、IJCEH (International Journal of Clinical and Experimental Hypnosis) に掲載されている論文の中から興味深い内容のものを複数選び、その要約を翻訳したうえで学会誌に投稿することを行ってきました。ただ、残念なことに、学会誌の発行が滞っていたために、トピックそのものが古くなってしまったくらいはあるものの、第一回目の要約情報は次巻の学会誌に掲載される予定です。今任期中もこの活動は継続的に行う予定で、新しい国際交流委員会委員の先生方に順番に担当して頂

き、会員の皆様に催眠研究の最前線的话题を提供していきたいと考えています。

わが国の催眠学会の国際的な活動は、前回のニューズレターで紹介させて頂いた若手研究者の活動は若干あるものの、未だに低迷を続けております。2015年に開催されたISH (The International Society of Hypnosis: 国際催眠学会) の第20回パリ大会では我が国からの参加者は全くありませんでした。しかしながら、わが国における催眠研究が決して世界レベルに達していない訳ではなく、これまで発信する努力を怠っていただけのように私は感じています。来年開催される国際催眠学会第21回モントリオール大会 (The 21th International Congress of Hypnosis will be held in August 21-26, 2018 in Montreal, Canada.) には是非とも多くの参加者が集えることを願っています。モントリオール大会の開催要項や参加申し込み、研究発表申し込みの方法については、大会ホームページへのアクセス方法が本学会ホームページからもリンクできるようにお願いしているところですので、ご覧ください。

最後に、本年11月3日 (金・祝)~5日 (日) にかけて鹿児島大学で開催予定の日本臨床催眠学会との合同学術大会においては、アメリカのワシントン大学のMark p. Jensen先生を招聘しております。Jensen先生については既にその業績についてはご存知の先生方も多いかと思いますが、慢性疼痛治療の効果研究を積極的に推進されてきておられ、また、慢性疼痛患者への催眠及び催眠認知行動療法に対する実践も行っておられるので、効果研究の世界的動向に関する情報だけでなく、実践的な臨床技法の紹介もして頂けるようお願いしているところであります。会員の皆様におかれましても、是非、合同学術大会にご参加いただき催眠研究の世界的な動向について関心をお持ち頂けると幸いです。

以上、国際交流委員長の着任に際しての活動報告と今年度の活動計画について記させて頂きました。微力ではありますが、新たに構成された委員との連携で国際交流の活性化に尽力できればと考えておりますので、どうかよろしくお願い致します。

倫理委員会より

松原 慎 ((医) 恵愛団 福岡病院)

今期より理事長のたつての依頼で倫理委員会を担当させて頂くことになりました。

現代においては、男女共同参画を促進し、様々な差別をなくすことが大切になってきております。さらに、セ

クハラ、パワハラ、アカハラ等様々なハラスメント問題について厳正に対処することが求められています。

催眠療法は、まだまだ非専門家からの偏見は平成の今となっても根強いものがあります。医師や臨床心理士や歯科医師として専門業務を行う者の中にも催眠を誤解している人が少なくありません。催眠療法の有効性・有益性を発信していくのは本学会の使命であり、理事長を中心として全員が懸命に取り組むべきものでありますが、倫理委員会では特に、催眠の研究・臨床・教育が中立公正でかつ科学的に行われていることを倫理の切り口から検討していくことになります。

会員の皆様は、安心して学会活動や、研究・臨床・教育の活動が出来るよう、倫理的問題の発生に関しては速やかに倫理委員会へご相談して頂ければと思います。

今後の運用の展望としては、研究委員会とは、研究倫理の是非の検討を行うことになると思われ、企画・教育委員会とは主として研修会における倫理的問題の有無について連携して検討致します。資格認定委員会とは有資格者・指導者の倫理的配慮についても連絡を取り合い進めていきたいと思えます。投稿等の倫理問題が発生した場合は編集委員会とも相談しながら対処させて頂きます。

このように倫理委員会は他の委員会との連携や協力が不可欠となっております。

今後とも倫理委員会へのご理解とご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。

資格認定委員長就任にあたって

福井義一（甲南大学）

本学会の常任理事としての務めが2期目に入った。新理事長の就任直後から、強力なリーダーシップにより、精神的に各部門で様々な改革が進められている。資格認定についてもその例外ではなく、ドラスティックな改革に向けて、現行の制度の精査とその見直しを進めているところである。

そもそも、学会の資格制度とは、学会員にも学会にも相応のメリットが存在すべきであるが、現状ではそれが全く感じられないことも事実である。また、この資格制度自体が、催眠の業界全体の発展に必ずしもつながっていないことも危惧される。こうした点を鑑みて、より適切な制度に改めていきたい。

現行の制度については、学会HPでご確認いただきたいが、一瞥して非常に複雑であるという印象は免れない。そのため、制度自体や申請方法の簡素化を図る方向で検討している。それにより、資格取得者を増やすことができるだろう。また、現状では機能していない更新制度を厳格に定めて適用することで、有資格者の学会へのコミットを強めることもできるだろう。適切な淘汰圧もかかるに違いない。

なお、認定催眠士諸資格認定規定の第7条には、規定の見直しについて定められており、「本規定は、5年以内に見直されるものとする。」との文言があるが、2004年以降に見直された形跡は全くない。失われた十数年を取り戻すべく、見直し作業を進めていく所存である。会員の皆様においては、温かい目で見守っていただきたい。

高石昇 (高石クリニック院長 元日本催眠心理学会会員) ご逝去の報告

日本催眠医学心理学会 理事長 飯森洋史

元日本催眠医学心理学会 指導催眠士 高石昇先生が2017年4月1日にご逝去されたことのご報告を頂きました。
日本の臨床催眠の発展に多大なご貢献をされた高石昇先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。



//////// 編集後記 //////////////////////////////////////

ニューズレター第68号をお届けします。当初は大会第2号通信発行前に発行の予定でしたが、発行の順序が逆になってしまいました。発行が遅れたことについてお詫び申し上げます。(千葉)

////////////////////////////////////
